

渋谷区立松濤美術館

建築家の空間イメージの象徴、楕円形の吹き抜けがある美術館

東京都の渋谷区立松濤美術館は、都内2番目の区立美術館として昭和56(1981)年に開館。建築家・白井^{せい}晟一が設計した建物にはドイツで哲学や美術史、神学を学んだ白井の精神性をうかがわせる意匠がある。展示室の他、地下2階にはホールもある。



白井晟一が名付けた韓国産花崗岩の「紅雲石」が積まれた松濤美術館正面外観。緩やかに後退する円弧の壁は狭小敷地のポーチに広さを感じさせる。



楕円形の開口から外部空間が吹き抜けに取り込まれている。1階レベルでブリッジが吹き抜けを貫く。



中央が吹き抜けになった第1展示室。上部に展示室を俯瞰できる回廊がある(通常は立ち入り不可)。



地下2階エレベーターホールの照明は、白井が図面の上に小豆をまいて位置を決めたとされる。



2階にある第2展示室、サロンミュージゼ。じゅうたんやクロス、革製ソファが演出する邸宅の居間のようなつろぎの空間に美術品が展示される。



各階を結ぶ美しいフォルムの螺旋階段。照明器具も白井のデザイン。

松濤美術館は閑静な住宅地に位置することから、当時の建築基準法に則って高さ約10mの2階建とし、限られた敷地を活かすために地下2階を設けて4階層構造で建てられた。周辺住宅への配慮から外壁に窓は少なく、建物中央を貫く吹き抜けで採光する。吹き抜けの断面は楕円形で底部に噴水があるが、他にもファサードや銅板葺きの庇、外壁、螺旋階段、アーチ型開口に円弧や楕円の形状を繰り返し採用している。それらは吹き抜け・噴水から広がる波紋のようで、造形のリズムになっている。また、白井は建築物の原型を追求していたと

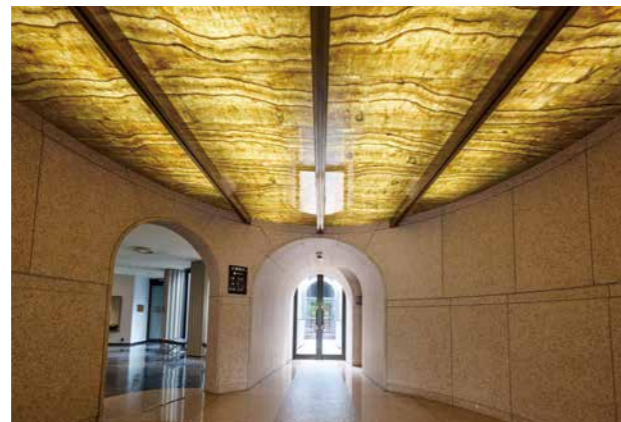
いい、この吹き抜けは象徴的な空間として造られ、これを中心とする建物の構成が初期キリスト教建築に見られる円形の施設を思わせるとする見方もある。^{※1} 一方、形状の純粋性を貫いたために展示室の壁も平面ではない。近代以降の展示室はホワイト・キューブが一般的であり、曲面は珍しい。2階にはサロンミュージゼと名付けられた展示室がある。梁や柱にブラジリアン・ローズウッドを使用、壁にはベネチアン・ベルベットを張り、革製ソファを配置するなど、高級感漂う居間のような空間で作品を鑑賞できるしつらえ。

ドイツ留学の間、白井は社会主義運動に関心を寄せており、公共施設に高級素材を取り入れれば、幅広く一般の人々も使える。そうした平等性にこだわりがあったとされている。^{※1} ここはかつて喫茶スペースとしても利用されていた。1つの空間が展示とつろぎの場というように複数の目的を持つことや、展示室以外に音楽会など芸術にまつわる催しが行える空間を設けることは、区の要望に応えたものでもあった。松濤美術館は晩年の代表作の一つで、白井自身も「私の全力をだし切った」^{※2}と語っている。

※1 学芸員 木原天彦氏による ※2 『朝日新聞』1978年7月17日掲載



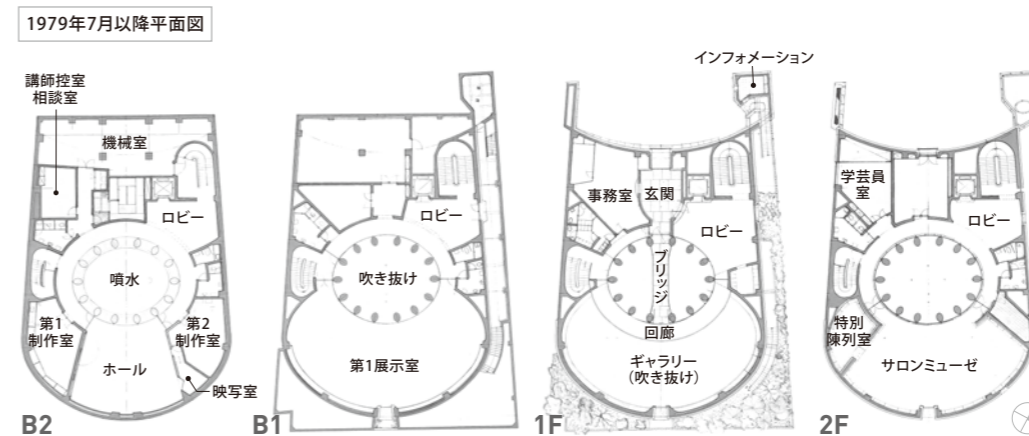
玄関右にある水飲み場。蛇口には白井のサインと、ラテン語で「清らかな泉」と書かれている。



エントランスの光天井。薄く切ったオニキスが貼られ、上部から照明の光が透過して美しい模様をみせる。奥のアーチを潜ると吹き抜けに掛かるブリッジに出る。



1階のアーチ型の壁とアイストップとして設けられた楕円形の窓。



参考:『白井晟一全集』同朋舎出版を元に作成

用語説明

【白井晟一】京大高等工芸学校(現・京大工芸繊維大学)図案科卒業後、渡独してベルリン大学などで学ぶ。帰国後、建築設計に従事。機能主義建築とは一線を画した理想的な空間を創出した。

【ホワイト・キューブ】近代以降につくられた、美術作品の展示空間に見られる、白い立方体の内側のような空間的特性をさしている概念。

【初期キリスト教建築】キリスト教初期の数世紀間におけるキリスト教建築の総称。

東京都渋谷区松濤2丁目14-14 協力:渋谷区立松濤美術館

